現代日本語動詞「反対する」のヲ格表示要因に関する考察

松野　美海

1　はじめに

現代日本語の「反対する」は、内省によると、例①のように、対象が二格で表されると考えられる。

①太郎は、上司の意見に反対した。

一方、例②のようにヲ格を用いた例も少数ながら見られる。

②俺は、何も君に、ご両親の結婚を反対するべきだったなんて言っていないよ。（片山奈保子『シャドー・イーグル』[1]）

ある動詞に許容される格体制は一パターンの動詞が多い（例③）。

③a．太郎は花子｛を／＊に｝見た。
　b．太郎は花子｛に／＊を｝かみついた[2]。

その一方、「土産｛を／に｝喜ぶ」のように対象格表示として、ヲ格とニ格の両者を許容する動詞（以下、ヲ／ニ格動詞）が、多くはないものの存在する。しかしそれぞれの格表示での用法の差異は、十全に明らかになっているわけではない。本稿では、現代日本語において、複数の格体制を許容する動詞として、「反対する」を取り上げ、ニ格をとる例（以下、ニ格例）と、ヲ格をとる例（以下、ヲ格例）の差異を考察し、格選択要因の一端を明らかにする。

2　問題の所在

現代語には、「（宿に／を）当たる」「触る」など、ヲ／ニ格動詞がいくつか存在するが、感情動詞に比較的まとまって見られる。感情動詞には、ヲ格のみをとる動詞、ニ格のみをとる動詞、ヲ／ニ格動詞が見られ、格形式の差異に主眼を置く先行論として、BANDO（1996）、山川（二〇〇四）などがある。BANDO（1996）に代表されるように、先行論の多くは、ヲ／ニ格動詞の（主に「喜ぶ」を例として挙げ）格選択要因として、ヲ格は対象、ニ格は原因、または原因と対象の両方という意味役割の違いを指摘する。しかし松野（二〇一七）に指摘があったように、「喜ぶ」でも「あこがれる」など他の感情動詞でも、この説明が必ずしも有効だとは言えない。感情動詞ではないが「反対する」についても同様である。例①②において、ニ格名詞のほうが原因の意味役割を、ヲ格名詞は対象の意味役割を果たすという差異は見いだせない。また山川（二〇〇四）は、ニ格名詞は基本的に対象であり、原因の解釈のみをもつ場合は付加詞だとしたが、各例の意味的差異は明らかにならない。

そこで本稿では、近年ヲ格が許容されるようになってきたように思われる動詞として「反対する」を取りあげ、ヲ格選択要因を探る。島田（二〇一四）によると、近年、若年層でニ

格から他の格形式への移行が目立ち、これは、歴史的に長期に亘って見られるニ格衰微の一現象であるとのことである。「反対する」もこの一例だとすると、ニ格衰微、またはヲ格台頭がどのような動詞から起こるのかについて考察するものとしても位置づけられる。ヲ／ニ格動詞を考察することで、ヲ格、ニ格の本質的な機能の記述の充実に寄与することができると考える。

「反対する」はサ変動詞であり、サ変動詞の中には、自他両用の動詞がある（例「被害が拡大する」「文字を拡大する」）ことが知られる。また日本語教育の観点に立つと、学習者にとって、動詞の自他、特にサ変動詞の自他学習は容易ではない。サ変動詞の格交替を考察することで、これらの関連する領域における課題の解決に示唆が与えられる可能性がある。

3　『現代書き言葉均衡コーパス』における調査

本稿では『現代書き言葉均衡コーパス』（以下、ＢＣＣＷＪ）の用例を分析する。ＢＣＣＷＪは、新聞、書籍、雑誌、国会会議録など、複数のジャンルから用例が得られること、また刊行（発表）年が一九七一年から二〇〇八年までの資料が収められており、比較的、近年の様

相が反映されていると考えられることから、調査対象とした。特に、インターネット上の掲示板、ブログの文章が収録されており、これらの資料は校正を経ないため、一般的に、比較的新しい変化が表れやすいとされる。検索の便から、「反対する」から前方一〇語以内にヲまたはニが出現する例を対象とした。また、本稿ではサ変動詞「反対する」を扱うため、「反対だ」「反対。」は除外した。

（1）資料ジャンルの偏り

BCCWJから得られたヲ格例は、コア資料では〇例、非コア資料を対象とすると、四〇例であった。このうち「Nを～として」という文型を用いることでヲ格表示がなされている例④と、意味が通らない用例（入力ミスによるものか）各一例は含まない。

④グリーンは（略）、例えば十九世紀イギリスにおける「貧民救助法」を、孝行や隣人愛を発揮しようという個々人の自主性を奪うものとして反対した。（海妻径子二〇〇四『近代日本の父性論とジェンダー・ポリティクス』）

一方ニ格例は、コア資料から一九例が得られた。非コア資料におけるニ格例は、ヲ格例がよく見られるインターネット上の掲示板（Yahoo! 知恵袋）、ブログ（後述）のみを対象とし、七二例が得られた。以後、ニ格例については、この七二例を対象として記述する。なお、この資料のみから得られたヲ格例は一一例であった。例⑤はインターネット上の質問掲示板のヲ格例、例⑥は、同ジャンルのニ格例である。

⑤日本の国連常任理事国入りを反対している人は、何を根拠に反対しているのでしょうか？（Yahoo! 知恵袋　ニュース、政治、国際情勢　二〇〇五）

⑥民主党は郵政民営化に反対しました！という事は政権とっても郵政民営化はしないって事ですね！（Yahoo! 知恵袋　ニュース、政治、国際情勢　二〇〇五）

ヲ格の用例は、発言の記録である国会会議議事録、小説等の会話文、インターネット上の質問掲示板の文章（Yahoo! 知恵袋）などに傾く。これらの資料から得られた用例は、ヲ格例全体の六〇・〇％を占める（四〇例中二四例）。ヲ格例は、話し言葉に近い文体、あるいは規範が求められなかったり、校正や内省を（あまり）経ず、修正がなされにくかったりする資

料において、表れやすいということが言える。また、例②や次の例⑦のように、校正を経ているはずの書籍にもヲ格例が表れていること、非コア資料であればヲ格例が一定数見られることから、単なる誤用ではなく、少なくとも現代では、ヲ格表示が許容されていると言える。

⑦さらに淀川治水に「強いて関係のなきもの」を加える必要はないと、洗堰等の滋賀県の工事を加えることを工事費の観点から反対したのである。（松浦茂樹　一九九二『明治の国土開発史』）

（2）ヲ／ニ格名詞の傾向

松野（二〇一七）において、対象格名詞の性質が格選択要因の一つであるとの指摘があったことから、本節ではヲ格・ニ格名詞に着目する。ヲ格例、ニ格例の名詞（句）を表1に示すように分類したところ、それぞれにおいて、動名詞に分類した名詞の割合が最も高いことがわかる。ヲ格に一五例（三七・五％）、ニ格例に四六例（六三・九％）見られる。動名詞には事態を指す名詞にスルを直接付加できるもの[3]（いわゆるサ変動詞・動詞連用形名詞）を分類した。

さらに直接スルは付加できないが、出来事を表す名詞を出来事名詞（N）として分類した[4]。動名詞と出来事名詞は、事態を積極的に表す名詞である[5]。例⑧⑨にそれぞれ動名詞をとるヲ格例、ニ格例を示す。前掲のヲ格例②⑤、ニ格例⑥も動名詞をとる例であり、これらは「（対独）援助」「結婚」「国連常任理事国入り」「移転」「民営化」という事態が生起することに対して、「反対する」ことを表す。

表1　ヲ／ニ格名詞（句）の分類

	ヲ格例		ニ格例	
名詞分類	用例数	%	用例数	%
動名詞	15	37.5	46	63.9
出来事N	4	10.0	3	4.2
こと	9	22.5	3	4.2
の	3	7.5	0	0
その他	9	22.5	18	25.0
総数	40		72	

⑧この時、対米戦準備の遅れを理由に対独援助を強硬に反対したのが、連合艦隊司令長官高野五十六を中心とした艦隊の将官たちであった。（たいらひろし一九九四『旭日の艦隊』）

⑨関係者からは改めて移転に反対する強い意見が寄せられた。（ブログ　生活と文化／環境問題／その他環境問題二〇〇八）

これら動名詞、出来事名詞を合わせると、ニ格例では五一例であり、全体の約七〇％を占める（七〇・八％）。ヲ格例でも五二・五％（一九例）で、約半数を占める。しかしニ格例における割合の高さには及ばない。一方、ヲ格例で次に優勢なのはコト節をとる例であり、二二・五％（九例）を占める。例⑩および前掲の⑦はコト節「子供を産むこと」「工事を加えること」をとるヲ格例である。

⑩知らせを受けた千夏は、子供を産むことを反対するが（略）（ブログ　エンターテインメント／テレビ／ドラマ番組二〇〇八）

ニ格例ではコト節は三例（四・二％）に留まる。対象格名詞が事態を積極的に表す名詞である傾向が強いことは両格形式に共通するが、ニ格は節をほぼとらないのに対し、ヲ格は節も一定程度の割合で見られ、異なる傾向を見せる。前述のように城田（一九九三）では、「反対する」のニ格は文法機能を担うとされるが、単純な名詞の形ではなく、節で示される名詞を文内で対象格として位置付けるには、文法機能を二次機能としてもつニ格よりも典型的な

対象を示すマーカーであるヲ格のほうが選択されやすいのでないか。松野（二〇一七）においても、ヲ／ニ格動詞である「喜ぶ」のヲ格例は、ニ格例と比較して節をとりやすいと指摘される。「反対する」では、調査範囲内ではニ格例に見られないノ節が、ヲ格例では得られることも同様の事象だと言える。

ここで、受身文について付言する。例⑪のようにヲ格例に受身文が散見されることも注目すべきであろう。

⑪スミッソンは、ベルリオーズより三歳年上で、当時彼との交際を双方の親兄弟から反対されるうちに、パリで興行していた英国劇団が閉鎖の憂き目に遭い、莫大な負債が彼女の肩にのしかかっていた。（桐山秀樹二〇〇三『クラシック名曲と恋』）

非コア資料中、ヲ格をとる受身文は一一例得られる。間接受身文は、通常、対象格の表示形式は維持され、ヲ格が許容されない動詞では、受身文になってもヲ格をとらない（例⑫）。

⑫a．花子に、太郎に会われては困る。【間接受身文】

b．花子が太郎に会う。【能動文】

cf．）a．花子が太郎を殴った。【能動文】

b．太郎が花子に殴られた。【直接受身文】

c．（私は）花子に太郎を殴られた。【間接受身文】

本稿のヲ格例数には、受身文を含めていないが、前述の資料の偏りは、受身文にも当てはまる。また、受身文のうち七例で動作主がニ格で明示されており、ニ格の重複を避けることも、ヲ格を選択する動機の一つになると考える。

4　アンケート調査

稿者はパイロット調査として、二〇一九年に日本語母語話者の大学一年生を対象に作文調査を行った。「反対する」または「賛成する」のどちらかを含む四語のサ変動詞について、それぞれの動詞を用いて自由に各一文を作るよう依頼した。「反対する」に関しては三七名

から回答が得られたが、ヲ格例は見られなかった。簡単な作文では、節名詞が表れにくいことが一因である可能性がある。ただ、次の例は示唆的である。

⑬友達がイケメンだと思う俳優に反対する。（二〇一九・六）

この例は、「友達がイケメンだと思う俳優は自分にとってはイケメンではない」と、友人の意見を否定する意味だと考えられる。「反対する」には「～を否定する」との意味的近接性があり、「否定する」の格体制が、意味的に近接している「反対する」に影響を及ぼしている可能性も、ヲ格選択の要因として考えられる。

5　まとめ

本稿では、「反対する」の対象格表示として、ヲ格が許容されるようになっていることを実例の調査から明らかにし、ヲ格例、ニ格例の差異に関して、使用されやすい資料と、名詞の種別という点から示した。「反対する」も、島田（二〇一四）の述べる、長期的なニ格衰微

の傾向に反しない。ヲ格が台頭するにあたって、どのような用例が許容されやすいのか、という点に関して、本稿は一つの例を示せたものと考える。

城田（一九九三）は、「反対する」がとるニ格は「ヲ格と同じく直接目的補語を示」（p.七七）し、ニ格がその二次機能である文法機能を担う語の一つであるとする。ヲ格と同じ働きをするのであれば、ヲ格に交替しやすい要因は備わっているように思われるが、一方で、「かみつく」「しがみつく」「とびかかる」はヲ格を取らない。城田（一九九三）で「反対する」とともに挙げられた語は、これらの語と、「賛成する」である。「反対する」「賛成する」はニ格名詞への物理的影響が想定されない。物理的な着点（「家に荷物を届ける」）はニ格が担う典型的な意味役割の一つとされてきたが、「反対する」のニ格は物理的な着点ではなく、ヲ格は基本的には着点を表示しないゆえに、広く対象格として用いられるヲ格を許容しやすいのではないか。このような点も含め、「反対する」や感情動詞など、両格を許容する動詞とはどのような動詞なのか、共通する要素に関しては今後、検討すべき課題である。

本稿では、ヲ格例が用いられ始めた時期については、調査していない。この点も含め、近年、ヲ／ニ格動詞として用いられつつある他の動詞についても調査し、現代語のヲ／ニ格動詞の様相、およびヲ／ニ格の機能を詳らかにしたい。

注

1　出典表記がある場合、コーパス検索アプリケーション「中納言」（国立国語研究所、https://chunagon.ninjal.ac.jp）を利用し、『現代書き言葉均衡コーパス』から得られた用例である。表記のない用例は作例である。

2　用例に付す＊は文法的に許容されないことを示す。

3　当該文脈において名詞が、事態ではなく、モノを指す場合は、動名詞に含まない。（例：プレゼントを選ぶ。）複合名詞の場合、後項名詞のみでスルが付加できれば、動名詞に分類した（例：対独援助→援助する）。

4　これらは、影山（二〇一一）の「デキゴト名詞」に相当する。

5　「事態を積極的に表す」とは、例えば「日記」であっても「日記を書くこと」を含意し得るが、これらの動名詞や出来事名詞は、名詞が事態を直接指すということである。

参考文献

影山太郎編（二〇一一）『日英対照　名詞の意味と構文』大修館書店

島田泰子（二〇一四）「現代日本語における二格表現の衰微と交替」『二松学舎大学論集』（二松学舎大学文学部）五七，pp. 四五-六五

城田俊（一九九三）「文法格と副詞格」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版

野田尚史（一九九一）「日本語の受動化と使役化の対称性」『文藝言語研究．言語篇』一九，筑波大学

松野美海（二〇一七）「格交替を許容する日本語感情動詞の格体制についての研究」名古屋大学大学院

文学研究科　平成二八年度博士学位論文
山川太（二〇〇四）「日本語における心理動詞の格表示について」『日本語・日本文化』三〇，大阪大学
山梨正明（一九九三）「格の複合スキーマモデル―格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
BANDO, Michiko (1996) Semantic Properties of –Ni NP and –O NP of Japanese Psych-verbs,『大阪大学言語文化学』五，大阪大学言語文化学会

The Factors that Case "o" is used for *Hantaisuru* in Modern Japanese

This paper discusses which factors select the case "o" for *Hantaisuru* (to oppose). *Hantaisuru* are sometimes used with "o" insead of case "ni" in modern Japanese. For example, "Ryoshinwa kekkon {ni / o} hantaishita (My parents opposed to my marriage)." In this paper, I show that "o" is often used in the sources which have elements of the spoken language. And I claim that "o" has a tendency to being used with the the "koto /no"- clause, and this means "o" has a grammatical function that can make an atypical object into an object in the sentence.

松野美海 | Yoshimi MATSUNO
名古屋工業大学留学生センター
日本語学
特任准教授